特集　長久保赤水

夏井 芳徳さんのはなし

優秀でユーモアがある面白おじさん

三十代前半ぐらいに里見庫男さんから「長久保赤水という水戸藩の地理学者がいて、いわきにも来ているんだ」と聞いて、赤水を知りました。どんな人だったのかは、龍燈を研究し始めてからです。

閼伽井嶽の龍燈についての一番古い記録は赤水です。鍋田三善も、大須賀筠軒もそれより新しい。龍燈を調べている時に赤水が出てきて『東奥紀行』も時々読みました。すべて漢文で書かれています。

赤水は漢文にとても素養があり、中国人が書いているような漢字だけが並ぶ漢文なので読むのが難しく、読みたかったのに読めずにきました。

このたび時崎清さん（高萩市）が長久保赤水顕彰会から絵本『りゅうのひかり』を発刊することになり「閼伽井嶽の龍燈のことなら夏井さん聞けばいい」と、顕彰会会長の佐川春久さんたちが訪ねてきてくれました。

時崎さんは赤水の地図「改正日本輿地路程全図」のいわき沖の龍燈の注記を元に、絵本を作りました。わたしはそれまで、赤水の地図に注記があることは知りませんでした。『赤水文章』（赤水が書き残した文章をまとめたもの）というのがあって、そこにも龍燈の記述（「遊閼伽井嶽觀龍燈記」）があることを教えてもらいました。

赤水が初めて龍燈を見た時のことが具体的に書かれています。二十八歳の時。湯本温泉に来て、閼伽井嶽の龍燈を確かめに行こうとなった。「かねてから疑問を抱いていた」と書いてあるので、話はもっと前に聞いていたのでしょう。閼伽井嶽まで歩いて行きました。

たぶん湯本から堀坂を越えて内郷に入り、鬼越を通って好間から七曲りを歩いた。道に何度も迷ったと書いてありますが、それほど時間はかかっていない。閼伽井嶽の宿で夕食をとり、見計らって龍燈場に行き、翌朝、再び行って眺めると、龍燈が見える所は水の流れがあるのがわかりました。

ですから赤水は間違いなく龍燈を見ています。前の晩に行って光が見えなかったら、翌朝は行きません。龍燈を見たから、翌日、地形などを確かめたのです。

『東奥紀行』の旅は、一行七人で高萩を出発して、夕方に湯本に着き、四十三歳の赤水は旅支度をときました。しかし同行の若い人たちから「まだ日が高いから平まで行きましょう」と言われて「馬じゃないと行かない」と駄々をこね、赤水だけ馬に乗りました。

平に着いても日没まで間があったので飯野八幡宮に行き、社殿の彫刻を見て感動したようです。その日は一町目の宿屋に泊まり、翌朝早く、富岡に向けて出発しました。先を急いでいたから閼伽井嶽には行けず、道すがら龍燈の話を同行者たちに聞かせました。

赤水は相馬野馬追を見たかったのでしょう。四倉では干物を作っていて臭くてたまらなかった、と書いてあり、波立薬師に寄ってお坊さんから説明を聞き、久之浜の海岸辺りでお昼を食べました。

広野では雷雨に遭って少し涼しくなり、楢葉を通って富岡の宿屋へ。宿屋の主人は学問好きで「水戸藩には素晴らしい学者が三人いる」と話しました。そのなかに赤水の名も入っていて、赤水は名乗らずに「その三人で一番素晴らしい学者は」と聞くと、主人は「赤水」と言いました。そこから先は読んでいません。

旅は仙台、松島、石巻、鳴子、鶴岡、村上、津川、那須と続き、高萩に戻る。『東奥紀行』は地名なのか一般名詞なのかもわからず、地元の人間じゃないと読めません。そこに書かれている地域の研究者がみんなでプロジェクトをつくり、それぞれの地元を読んで現代語訳すれば、詳細なものを読めるようになるのですが。

地図を作るのに東北の情報が少なくて、赤水は地名を聞いたり、情報を入手したりするために旅したんだと思います。

赤水は学者として優秀でした。水戸藩というバックを持ち、自分の力で全国展開して世の中のことを解明しています。『東奥紀行』を読むと随所に笑いがあって、ユーモアがあるのがわかります。面白おじさんです。

今後『東奥紀行』の富岡から先を読破したいですが、大変だと思います。

こで隠居生活を送ったのは八十歳からで、晩年の四年間を過ごした。

松月亭は赤水の死後に二度、火災に遭い、現存しない。一九六七年（昭和四十二）、赤水の生誕二百五十年を記念して松月亭の碑が建てられ、いまもありし日を伝えている。

赤水のお墓は旧宅の近くにある。街道沿いに立つ「長久保赤水の墓」が目印で、小道を進んで行くと長久保家の墓がある。赤水の墓は柵で囲われているのですぐわかる。南隣に父、実母、継母の墓が並んでいる。海岸のそばの砂地で、波音が聞こえる。

一八五二年（嘉永五）、吉田松陰が東北を旅した時、赤水の墓参りをしている。松蔭は兄に宛てた手紙に「これがなくては不自由」と、赤水図（「改正日本輿地路程全図」）にふれている。

松岡小学校の北側にある竜子（たつご）山には戦国時代に山城があった。一六〇二年、戸沢政盛が国替で来て、四年後、竜子山城を改築。平城も築き併せて松岡城と改称して居城にした。同時に城下町も造られた。二十年後、政盛が新庄藩に転封になると、水戸藩の所領になり、付家老の中山信正が城主となった。

松岡城には天守閣や櫓はなく、陣屋ぐらいの規模だったといわれている。山頂に本丸、麓に二の丸御殿や家臣の住まい、三の丸に役所や台所、家臣の住まいが軒を連ねていた。

それから四百年近い時を経て、松岡城址周辺の景観ガイドラインが作られ、石畳の道や黒塀など、江戸時代を思い起こさせるような整備がされた。お屋敷通り（関根川にかかる関根橋から松岡小学校まで）には武家屋敷門がいくつか残っていて、竜子川にかかる大手橋を渡って正面、三の丸の跡に松岡小学校がある。

松岡小学校の校舎が改築され、二〇一一年一月、校舎内の郷土資料室に松前藩藩校「就将館」が開館した。明治維新の八年前に、いまの松岡小学校の入口付近に創立された藩校で、士族や郷士、庶民の教育がされた。館内にはジオラマや歴代藩主の肖像画などが展示されている。

高萩清松高校そばのいわん坂の途中の高台には、赤水の師で医師の鈴木玄淳が眠っている。赤水は赤浜の自宅からいわん坂を通り、4㎞ほど離れた玄淳の私塾に通った。